

2023 年度 第 2 回子ども学コロキウム @ 東北

八戸えんぶりから考える子どもと祭り

副理事長・研究開発委員長 安藤寿康

昨年末(2023 年 12 月 23 日)に秋田大学で開催した第 1 回コロキウム「子どもの発達から考えるナマハゲ」に引き続き、2 月 18 日(日)に、2024 年度の子どもの学会議の開催場所である認定こども園八戸文化幼稚園で、2023 年度 第 2 回「八戸えんぶりから考える子どもと祭り」を開催した。

「祭り」に子どもがどのように関わっているかは千差万別である。京都の祇園祭のように着飾った稚児たちの巡行という形もあれば、青森のねぶたや弘前のねぶた、五所川原立佞武多のように、子どもたちが笛や太鼓などの楽音を奏でたり踊ったりしながら練り歩くという形もある。秋田の竿灯まつりでは、子どもが高度な技を披露することもある。一方、高知のよさこいや徳島の阿波踊り、沖縄のエイサーなど、全国的に名高い祭りでは、演者の数こそ多いにもかかわらず、そこには子どもは登場しない。むしろ日本各地域の学校で、伝統文化の継承を目的とした教育的活動として取り入れられる形になることが多いようである。

表 全国の代表的な祭りにおける子どもの参加人数と役割の比較 (安藤による試論)

	人数	役割	必要な技量	備考
八戸えんぶり	多	演舞	大	
三社大祭(八戸)	多	楽器(笛・太鼓)	中	
青森ねぶた	多	楽器(笛・太鼓)	中	
弘前ねぶた	多	楽器(笛・太鼓)	中	
五所川原立佞武多	多	楽器(笛・太鼓)	中	
なまはげ(男鹿)	少(個)	号泣	?	
竿灯(秋田)	少(個)	演舞	大	
祇園祭(京都)	中	稚児巡行	小	
よさこい(高知)	無	-	-	教育の中で
阿波踊り(徳島)	無	-	-	教育の中で
博多どんたく	多	行進	小	
唐津くんち	多	行進(曳き子)	小	
エイサー(沖縄)	無	-	-	教育の中で
子ども歌舞伎	多	演劇	大	

祭りに関する民俗学的、社会学的研究は枚挙にいとまがないにもかかわらず、特に「子ども」に着目して、祭りの中での役割、地域社会との関わり方、子どもの成長への意味などを体系的に比較検討した研究が、管見によれば見当たらない。これはアカデミックには明らかに盲点であり、ここにこそ子ども学の出番があるのではないか。

このように祭りにおける子どもの関わり方を比較したとき、八戸えんぶりは登場する子どもの数、子どもが果たす役割や必要とされる技量に関して、他のあらゆる祭りの中でも特筆すべき活躍を見せる祭りであると思われる(上表)。それは写真にも示すように、子どもの全体に占める割合が突出して多いのみならず、年齢性別に分かれた集団を作って、それぞれに独特の台詞と振り付けの舞を踊る。ソロでの出番もある。これが街全体で 30 以上の組によって、期間中、広場、神社、ショッピングセンターなど街のさまざまな公共の場で踊りを

披露し、さらに期間中は「門付け」で市内を回り、ご祝儀を受け取ると、子どもが店先で演舞してくれるなど、子どもの存在感が非常に大きい。

コロキウムでは、冒頭に新組 帆 組によるえんぶりの実演を披露していただいた。まず八戸えんぶりを象徴する見事な烏帽子をかぶった青年 3 人が、太夫としてジャンギという金属音のする長い棒を鳴らし、大きく首をひねる美しい動作を伴った踊りを見せてくれた。それに続いて児童期の男子、青年期の男子、そして幼児まで含めた女子と次々に群舞を見せた後に、釣り竿をもった成人の男性がえびす舞を披露し、祝儀袋をつけた魚を釣り上げた。それはそれぞれによく訓練された見事な演舞だったが、特に印象的だったのは児童期の男の子たちが踊り始めた途端、それまで後ろでおとなしく座って待っていた幼ない女の子が、待ちきれなかったように嬉しそうに立ち上がって、その音楽に合わせて全身で体を動かして踊り出したことだった。それはこの演舞が型にはめられた儀式としてふるまわれるのではなく、幼子の魂にまで響いて自ずから踊り出さずにはおれない心の高まりを生み出している証だと思われた。これは本来子どもの出番のないはずの徳島の阿波踊りでも、勝手に道に飛び出して見事な踊りを見せるほほえましい幼児の姿があることにも認めることができる。ホンモノの祭りは、大人に儀式としてやらされるのではなく、このように子どもの魂にじかに届き、その身体を自らの内側から動かしてしまう何かがあることを表している。これこそが本当の「伝統の継承」だろう。

えんぶりの実演に続いて、齋藤信哉氏（八戸市教育長）からこの行事にかかわる自治体として取り組みの沿革や準備期間中の多世代間の交流について、また山崎敬子氏（玉川大学芸術学部 非常勤講師・学習院大学さくらアカデミー講師）からは、八戸えんぶりの祭祀としての位置づけの特異性について、全国のさまざまな祭りとの比較からお話をいただいた（詳しくは山崎先生の報告、ならびに配信予定の動画をご覧ください）。

参加者へのアンケートからは「小さいお子さんの登場にうるっときました。地域のお祭りの意義を見直すことが、日本再生に必要だと思いました。」「小さいころから祭りは自然と関わるものとして考えていましたが、きちんとした伝統があるし、子どもの成長にも大事なことなのだと感じました。初めて知ることもたくさんありました。」など、祭りに子どもが関わり、その姿を見せることの意義を再認識する声が数多くあった。

なお今回のコロキウムは、地元誌「デーリー東北」で紹介された。

